三下系TS悪役令嬢

はなぼくろ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

才能マンな悪役（バトルもの）令嬢が訳アリ系主人公とか堅物騎士とかをボコってイキるだけの話

目次

5 ……26
4 ……19
3 ……13
2 ……9
1 ……1

1

コロシアム。騎士見習い同士が各々の研鑽を示し、その門出を占う場所。そこでの結果は後の進路にも影響するのだから騎士見習い達はそれはもう必死に鎬を削り合う。その様は観ていて白熱もすれば、滑稽でもあり、だからこそ見世物としての価値もあるので暇な貴族連中も騎士学校の生徒と共に唾と野次を飛ばすのに躍起になっている。そんなこんなで外は非常に喧しいことこの上ない。

それに対して此処は比較的静かだった。外の喧騒がどこか遠くのものに感じられる此処は闘技場の入り口だった。ここを通って、騎士は自分の闘うべき敵と相見える。だからなのか、闘いの場に向かう者の最後の憩いの場として有るここは、コロシアムにあって精神を鎮めるにはもってこいの静謐さを保たれている。

そこに、彼女はいた。選手ではない。ここに来る誰かを待って、彼女は石造りのひんやりとした壁にもたれかかっていた。

ある衝動に駆られて、彼女はここに居る。だからといってもう直ぐここに来るであろうあの女になにを言えばいいのか、まだ分からずにいる。

心の整理がついていない。それでも、実際に相対せば自ずとその目的は果たされるであろうという確信があった。そして、はたしてその時が来た。

カツン、と。異様にその跫音は響いて聞こえた。思わず顔を跳ね上げる。来たと、そう思った。姿も未だ見えていないというのに、彼女は得体の知れないプレッシャーを感じて底冷えするような不吉な予感を覚えた。

ソレはずるりと、通路の奥の影から這い出て来たように見えた。実際はそんなことはないのだろう、そうやって現れたその女はきっと、ただ向こう側からただ歩いてやって来ただけなのだ。それでも、凶兆を思わせるその女の粘ついた不気味さが、彼女を得体の知れないバケモノのように幻視させていた。

ビビるな！

鼓舞するように両頬に平手を打ち付ける。気付けだ。乾いた痛みが呑まれかけていた自我を覚醒させる。そうしてやっと、壁から背を離して、彼女は女に向き合うことが出来た。

死人のような白い肌を貼り付けた女だった。とてもではないが血が通っているようには見えない。肩まで伸びた頭髪があまり見かけない漆黒であるからか、余計青白く見える。

そして、目。その眼だ。それが何より彼女は恐ろしかった。女の髪と同様、真っ黒な目玉だった。だけれど、そこに感じられる意思は黒よりももっと黒い。コールタールよりも粘着質で、どす黒くて、絶望的な双眼がそこにはあった。彼女にはそれが、肥溜めに溺れ掛けているドブネズミが孕んでいる色と同じモノに感じられた。それが精巧な人形のような細面の上に乗っかっているのだから、不気味なことこの上ない。

ソレが幽鬼のようなふらついた足取りで近付いてくる。その視線は胡乱げで、足元を向いてはいるが何処を見ているのかはさっぱり分からない。

「あ？」

やっと彼女の存在に気付いたのか、女の視線が持ち上げられる。視線が交差する。相変わらず、光沢のない眼だと思った。こちらを覗くその眼には、とてもではないが自分の姿が映っているとは思えなかった。ただ、底無し沼のような闇が広がっているだけだ。

先に視線を切ったのは彼女の方だった。なんとなく、再び呑み込まれかけた雰囲気を感じ取ったから。

「ええと、私を待ってたの？」

気さくに話掛けてくるソレに、あまりにもイメージから乖離したその声音に怖気を感じつつ彼女は「ええ」と返した。

それに対して女の方は頬を掻きながら困った様に肩を竦めた。

「ああ、ごめんなさいね。悪気はないんだけど、どちら様だっけ」

期せぬ言葉に、思わず歯噛みする。面識はある。何しろついこの間、この先の闘技場で自分らは確かに闘ったのだ。結果は彼女にとって惨憺たるものではあったが、まさか歯牙にすらかけられていなかっ

たとは。
　目に見えて膨れ上がった敵愾心に、女の方はバツの悪そうな顔をするだけだった。
「いや、顔は覚えているのよ？　ただ、私ってあまり物覚えがいいほうじゃないから。顔と名前が一致しないのよねぇ。悪いけど改めて教えて貰えるかしら」
「セリカよ。下の方は……　覚えてもらわなくてもいいわ。この前、貴女と闘った」
「うん、覚えてる。それで？　私になにか用？」
　用。用か。用ならある。でも、何かして欲しい事があるとか、お願いがあるとかそういうことでは無い。伝えたい思いがあった。どうしても言わなければならない言葉があった。だからセリカはここに居る。
　そして、一瞬の躊躇いの後、セリカは毅然として言い放った。
「貴女のやり方は間違っている」
「……　ふぅん」
　突然突き付けられた否定の言葉に、女は一時驚いたようだったがすぐさま表情を変えた。眼を蛇のように細めて、どうやって嬲ろうかと獲物を品定めするかのような挑発的な視線に切り替わる。
　それを見てやはり先程の一見友好的な態度は擬態だったかとセリカは確信した。こちらが、女の本性。
「なんの事だかサッパリね。何を言いに来たのあんたは」
「力の使い方。貴女のように誰かを傷つけ、貶めるためにそれを振るうなんて絶対に間違ってる。強さの本質はきっと、自分以外の誰かを守るとか、そういう正しさの元にある。それを、この先に待っているアイツが、貴女に教えてくれる。……　言いたかったのはそれだけ」
　自分の力量では女にそれを伝えることが出来なかった。だからそれを言葉にしに来た。悔しいが、自分よりもきっと強い幼馴染にそれを託した。こんな負け惜しみしか言いに来れないような自分に恥ずかしさを覚えながら　、それでも彼女は女に一言申さずにはいられな

かったのだ。
　言いたいことは言い切った。「邪魔したわね」と女に言葉を掛けながらこの場を後にしようとするセリカの背に、「待ちなさいよ」と女の声が投げかけられた。
「力の本質ですって？　私より弱っちいあんたに、一体チカラの何が分かってるって言うの？」
　女の挑戦的な言葉に、セリカは足を止めた。女の言葉は、全ては否定しきれない。セリカが彼女より弱いということは、この間の一戦からしても覆し切れない事実だった。一目瞭然の力の差がセリカと女の間にはあった。
　それでも、真の正しさが何であるかはセリカにも分かっているつもりだった。
「確かに、私は貴女よりは弱い。それでも正しさがどういうモノかは分かる。そういう風に生きてきた人達を、そうであろうとする者達を知っているからだ。だからこそ、私もそうでありたいと思う」
「へぇ。じゃあその正しさっていうのは誰が決めたの？　あなた？　剣聖？　それとも神様？」
「分からない。それでも、過去から連綿と誰かが紡いできたソレは確かにある。そう信じている。普通に生きていれば、誰もがそれを理解出来るはずだ」
　そのときセリカはなぜだか、きっと気のせいだと思うが、「普通」と口にした瞬間に、女の気配がそれ以前よりももっと酷く冷めたものに変わったような気がした。
「なにが言いたいかは分かんないけど、兎に角あんたは力は正しさとやらの元にあるもんで、正しい奴はみぃんな強いってことを言いたいのね。だから私はその正しい生き方をしてる奴に負けて、そいつを知れって、そう言いたいのね」
　言い方は悪いし捻くれてはいるが、概ね合っていたのでセリカは頷いた。それを見て、女の紅い唇が亀裂を思わせる笑みを浮かべた。それに対してセリカは、言い様のない不吉な予感を覚えた。
「ふぅん。それじゃあ聞くけどさ」

あんたのお父さんとお母さんは正しくないから死んだっていうことなのね？

言葉を解するよりも早く、既に身体が動いていた。腰に佩いていた剣を抜刀し、迅速に殺意を実行すべく肉体に染み付いた鍛錬の成果を再現しようとしていた。

だがそれは他でもない抹殺の対象である女に阻止された。

いつの間に近付かれたのか、女はセリカの目と鼻の先まで既に接近していて、剣の柄に手を掛けたセリカの腕に手を添えて抜刀を阻止していた。

動かない。セリカは冷や汗をかいた。思いっきり力を込めて抜刀せんと踏ん張っているのに、その病的な細腕のどこに力が蓄えられているのか、ただ手を添えられているだけなのに、セリカの腕は微動だにしない。

驚愕の最中にいるセリカの耳元に、息が掛かるくらい近くに女の顔が近づく。それから、セリカの耳の中に悪意が注ぎ込まれた。

「そういうわけじゃないんでしょうね。きっと善良な両親だったんでしょう。でも死んだ。そして、それを為した殺人鬼には未だ応報が成されてないときた。何故かしらね。殺人鬼の方が正しかったから？」

「前提が違うのよ。正しいから強いんじゃない。強いから正しいの。あなたの信じる正義の歴史っていうのはね、それ以外の奴を正義の味方とやらが皆殺しにして出来た歴史なの」

「あなたの両親が死んだのは正しくなかったからじゃない。弱かったからよ。あなたの両親を殺した殺人鬼が今ものうのうと生きているのは正しかったからじゃない。強かったからよ」

「そんな暴力の世界を見てきたあなたなら、本当のセカイのカタチっていうのが実は分かってるんじゃないの？」

「知っているでしょう？　――――チカラは、全てを肯定する」

＊

物心ついたときに俺は私を自覚した。

俺には前世の記憶がある。といってもロクな人生を送って来なかったので、ロクな記憶がなかったんですけどね。なんかやたらと豊富なオタ知識とか薄い本並のエロ知識しかない。この記憶要る？

とまぁゴミとクズの塊みたいな物の役にも立たん前世の記憶であるが、少なくとも、今世と前世の世界観の違いを理解することには役立った。

今生の俺の舞台は俗にいう剣と魔法のファンタジーってヤツだ。やったね！　魔法が使えるよ！　イェーイ。

そうと分かれば早速本とか読み漁ったり身体を鍛え始めるのが前世持ちのサガというものだろうが、慌てて行動に移さないのがニートクオリティ。

先ずやることは容姿の確認である。これ常識。ＡＰＰの善し悪しは今後長い人生にうんざりするほど関わってきます。もう低ＡＰＰの人生というのは嫌というほど味わってきたので、これが悪かったらリセット案件ですね。いやリセットせんけど。

「うーん、これは美少女ね。間違いない」

薄々と気付いている人もいるかもだけど、一応説明しておくと俺の前世は男で、今世は女です。なんか口調が性別に引っ張られてるのはそのせい。

にしても、鏡に映る幼女のあどけない美しさのなんたることかよ。まだ幼さはあるけどこれは将来美人さんですね。見ろよこの黒髪の艶やかな煌めき。これはこの先チヤホヤされること請け合い。待ち遠しいぜ。一回美少女に転生してヨイショされまくるのが夢だったんだよぼかぁ。

「なに鏡の前で突っ立ってアホなこと言ってんのさエンヴィ。気持ち悪いぞお前」

鏡越しにひょこっと金髪蒼眼の将来イケメンが確約されたも同然のがきんちょがそんな失礼なことを言ってきた。
こいつはシリウス君5歳児。俺の許嫁らしい。はぁって感じ。糞ガキが、こちとら美少女やぞ？んな口利いていいと思ってんのかオォン？
因みにエンヴィっていうのは俺の事。あだ名だけどね。本名エンビディア・オブセシオンという。家はそこそこ有名なとこの貴族らしく、早速こうして政略結婚紛いなことをさせられている。なんか俺達の親同士が仲良いとかで口約束でこうなったらしい。もうお前らで結婚しとけよと、おっさん同士釣り合ってるよ。
まあそんなことは置いといて、ここは前世込みで年長者である俺からシリウス君を叱らないとだ。不服ではあるが将来の旦那様らしいので、今のような思ったことを直ぐに口に出すようなアホでは貴族社会は恐らく生きていけないであろうから俺が矯正せねばな。
「はぁん？　アホって言う方がアホなのよ、そっちこそンな青チョビた顔で私の部屋に入って来ないでくれないかしら。っていうか随分と汚れてるけどまさか外で泥遊びして来た帰りに私のとこ寄ったんじゃないでしょうねこの馬鹿」
「はぁ？　アホな奴にアホって言って何が悪いんだよ。ちなみにお前の方が馬鹿だ。アホ馬鹿。あっそうそう、そんなアホ馬鹿のお前に土産があってきたんだ感謝しろアホ馬鹿」
「アホ馬鹿アホ馬鹿連呼すんな、ムカつくんだよアホ馬鹿。――――っておまっ、それってまさか」
高度なやり取りをしている最中、両手を丸めて合わせた中身をシリウスは俺に見せつけてきた。
それまでなんじゃらほいと呑気に訝しんでいた俺は、薄らと覗く小さな緑の群れを見て顔を引き攣らせた。
「おまっ、やめろ。それだけはやめろ。落ち着け、話し合おう」
「苦労したんだぜコレ集めんの。こんだけ頑張ったんだから報われるべきだ。そうだろ？」
そう言って、ニヤついた奴はその手を解放した。そしてばら撒かれ

る飛蝗、総勢８匹。それが私の部屋に解き放たれた。
悲鳴と共に俺は誓った。絶対こいつとの婚約は解消してやると。

2

俺の家について話しておこう。オブセシオン家はここバシレウス王国において結構な権力を持つ名家らしい。つまりボンボンもボンボン。この家に生まれた限り、よっぽどの事がなきゃ食いっぱぐれないというわけである。

がはは勝ったな、風呂入ってくる。いやぁこれで底辺貴族かなんかでいつ首を切られるかも分からんっていうならさ、俺も腹括ってなんかせにゃならんかなぁとか思ってたけど、杞憂だったね。

優秀な兄上もいるし、顔だけはいい妹もいるし、俺が何もやらずともウチは安泰というわけだ。よかったよかった。これで俺も気兼ねなくニート生活を送れるというものだ。

そんなふうに考えていた時期が俺にもありました。

先ず言っておくことがある。この世界には魔法というやつが存在していて、それに伴って魔力というものも存在する。

で、貴族連中っていうのは大抵この魔力が高い。というのも当然で、貴族になるってのは莫大な財をどっかで生み出したとかでもない限り、先祖が戦争で結構な功名を立てたとかで成ることが多いわけだ。そんで戦争するってなったら、この時のメイン兵装が槍とか剣とか弓矢なわけで、めっちゃ強い魔法が使えたらそりゃもう無双ルートにいくわけ。

魔力の質や高さはかなり血筋に依存するところも多いから、そんなメチャ強先祖の血筋を引いてる貴族の人間はそりゃもう優秀な魔力を持って生まれてくる。

そういう傾向が強いと、貴族社会で魔力の質や量の高さっていうのは本人の評価に直結することに繋がってくる。一目置かれるようになる。

逆に低かったらそりゃもう侮られまくる。ぶっちゃけいじめられる。家族にも腫れ物扱いされるようになるしでいい事なし。

とまあこの世界ではそういうふうな背景があるわけだ。

正直ね、この話を知ったときは俺は鼻ほじ状態でしたね。なんでっ

て、俺エリート貴族だからさ、完全に無関係の話だと思うよね。しかもだよ、神様とかそういうのに遭遇はしてないけど我転生者やぞ。絶対チート級の才能が俺の体に眠ってるって、そんときは信じて疑わなかったよね。

ここまで話して、薄々気付き始めた人も居るだろうから本題に入ろう。

俺氏、魔法の才能なしw

びっくりするよね。俺もびっくりしたし、俺の魔法適性見てくれたセンセイもびっくりしてたもん。これマジ？って感じで俺の方見てた。流石になんかの間違いだろって感じで何回も再診断してくれたけど、物の見事に適性ゼロって事実を突き付けられた。

その時の俺の気持ち分かる？　せっかく現代社会から魔法アリのファンタジー世界に来たのにお前魔法使えねえからって言われた俺の気持ちが。

精神年齢とっくに大人な俺が久方振りに覚えた高揚感どうしてくれんの？

遠足前に眠れなくなる子供の気持ちでワクワクが止まらなかった俺のこの気持ちはどうすればいいの？

終わったわ。マジで。

そんな訳で、今現在俺は実家でネグレクトを受けております。

なんだろうね、この距離感。今飯食ってるんだけど、一応は家族と同じ食卓を囲ってはいるんだ。でもね、結構近い距離で食ってる他の家族連中に対して俺の席はこのクソデカテーブルの反対方向にある端ときた。これ一緒に食う意味ある？　イヤミですかそうですか。死ね。

「ご馳走様」

なんか和やかに話してる脇で輪にも入れず飯を淡々と食うのも気まずいんで、さっさと食って早々に自室に戻るに限る。

あ～イライラするぜ。何が悲しくて異世界に来てまでンな幼稚な嫌がらせを受けにゃならねえんだ。

「あらお姉様、もう食べ終わりましたの？　相変わらずですわね。そ

んなにお腹が減っておりましたの？」
　そしてコレだよ。席を立って背を向けた俺にそう声を掛けてきたのは我が妹、アロガシアちゃんだ。まだ11歳だというのにもう淑やかな嫌味が言えるまで成長している。いや、姉として妹の成長が目覚しいようで鼻が高いよ。未来の社交界は君に任せた。
「ん、まあそんなところよ。にしても随分とまぁお上品な物言いが出来るようになったじゃないアロガシア。褒めてやるわ。次は下劣な性根が隠せるようになったらやっと及第点ね」
　俺にはお嬢様言葉というのが分からんので直截な物言いで返しておく。
　あからさまにアロガシアの目に敵意が滲み出て俺を睨みつけてきたので結構効いたらしい。相も変わらず煽り耐性は低いな。お姉ちゃんお前のそういうところ好きだぜ。変にスカされるより、そんな感じに悔しさを剥き出しにされた方が気持ちがイイわ。
　それはそれとしてこの糞ガキ、いつか目に物見せてやるから覚悟しとけよボケ。
　そんな俺達を見る目は様々だ。
　お兄様は手のかかる妹連中を見るような目で苦笑いを浮かべている。彼は落ちこぼれ扱いの俺に対しても普通に接してくれるし何かと気に掛けてくれる人格者だ。自分の立場もあるし、親父の機嫌取りで俺の扱いに関して大きい声は上げられないらしいが、めっちゃいい子なので全然気にしてない。寧ろ好き。お前なら未来のオブセシオン家を安心して預けられるよ……。
　次に母上殿。この人は目に見えておどおどしておられる。なんか言いたげに口を開こうとするが、親父の方をチラチラ見てて機嫌を窺ってる。俺が一番イラつくタイプだ。言いたいことがあるならはっきり言えや！
「エンビディア、そういう言い方は無いだろう。アロガシアに謝りなさい」
　そしてこいつ、親父。こいつに関して言うことは特にない。いつも通り。いつも通り俺以外の肩を持つ。

まあ今回に限ってはそう言われても仕方がない物言いをした俺も俺なので一応謝っておく。
「ハイハイ、ゴメンなさい。ちょっと思ったこと直接的に言い過ぎたわね。次はもうちょいオブラートに包んで言うことにするわ」
そういう問題じゃないことは分かっている。敢えて言った。
家長に向かって俺のような小娘がこんな口をきくなんて、家族の間柄であっても結構な問題に発展しかねない。そんなことは承知の上だ。
正直な話、普段の俺ならンなわざわざ立場を悪くしかねないマネはしない。だから理由はある。
親父は俺にあまり深く干渉できない。強く言えない。たまにこうして威厳保つために小言を挟んでくるが、実力行使には移れない。それを知っているからだ。
私には魔法の才能がない。それは確かに、一般の基準に当て嵌めたらそうだ。でもね、使えないわけじゃない。使える場面は本当に限られるが、それでも、人の一生を台無しにするだけのチカラは備わっているのだ。
それを、私と私を診たセンセイ、そしてセンセイ伝てに詳細を聞いた親父だけが知っている。
癪だけどね。出来ることなら、普通の魔法が使えるようになりたかったと、心底からそう思うよ。

3

この世界における魔法の話をしよう。

といっても実践的な魔法の運用テクニックだったり小技のことじゃない。そっちに関しては全くの門外漢なので、あくまでこれは本とかを読んで学べる範疇の、基本的な魔法体系の話だ。

先ず、大抵の魔法には属性というものがある。それらは主に火水風土光の五つに大別されるんだが、どの属性にも分類不可な魔法は第六属性の固有魔法というやつに纏めて押し込められる。

すげー雑な分類だな。考えたヤツ絶対途中で面倒くさくなったんだろうなって最初は思ったんだけど、現在確認されてる固有魔法にはマジで規則性がなくて、こまかーく分類しようと思ったら百とか二百とかじゃ収まんなくなるので応急的な措置としてこうなったらしい。仕方ないね。ちなみに俺が持つ魔法もこの固有魔法に分類されている。

んでだ、固有魔法とか聞くとなんかオリジナルスキル感があってすっごいワクワクする語感があるんだけど、悲しいかな、世間的に評価されるのは五大属性の方だったりする。

理由はひとつ。ノウハウの有無だ。固有魔法は能力こそピンキリだが、使い方によっては強いやつはマジで強くて、五大属性なんてなんのそのって効果を持つのも少なくないんだが、如何せん一代きりの魔法故誰も修練方法や運用方法について知らない。

つまり実戦で活用できるような成果が出るまでかなりの期間を要するってことだ。しかも時間とコストを掛けても使い物になるかも分かんないときたら、煙たがられるのも無理はない。

その点で言えば五大属性魔法の方は過去にも保有者がたくさんいて、教育ノウハウが確立されているので短期間で実戦レベルまで仕上げられるし、そもそも五大属性の魔法はクソ強いのが大半なのでコスパでいえば圧倒的にこちらが良い。

そして魔法において基本的にエリートである貴族連中はこの五大属性のうち、2—3つに適性があったりする。中でもうちの妹は全属

性に適性を持つっていうアベレージワンとかいう稀代の天才。そりゃ調子に乗るわ。俺だって乗る。
ちなみに俺は全属性に適性がない稀代の落ちこぼれでーす。いえーい。しかも持ってる固有魔法も実戦じゃマジのマジで使い物にならないっていうどうしようもないカスでーす。ふぉーう。はぁ、糞が。
「人の目の前でため息をつかないでくださいな。鬱陶しい。気が散りますの」
「へぇへぇ、悪かったわね。こちとらやる事が無さすぎて暇なのよ」
俺と妹のアロガシアは今、センセイから与えられた魔法の課題に取り組んでいる。いや、俺はなんにもやっていないのでアロガシアだけがだが。
まあ、俺に限ってはやらないからやっていないんじゃなくて、出来ないからやりようがないだけなんですけどね。
それに対して、アロガシアはなんというか流石だという感じ。
今こやつは火属性魔法の基本中の基本であり、深奥の技術でもある熱制御の練習をしているのだが、これがヤバいのなんの。
やり方は至って簡単。火の中に手を突っ込む。以上。
いやエグいよセンセイ。11歳児にやらせることじゃねえ。一見地味で簡単そうに見えるこの練習方法だが、ぶっちゃけ現役の魔法士にやらせても失敗するレベルの所業だ。
先ず、精神的負荷が凄まじい。
そもそも、魔法の精密操作っていうのはかなり神経を削る作業なのだ。特に熱制御っていうのは精密性が要る魔法の代表格みたいなもので、微細な分子の分布を正確に把握した上で常に魔法でそれらの動きを抑制し続けるなんてことは余程集中してなきゃ出来ない。
加えて、ミスったら即座に手が火傷するというプレッシャー。火の中に手を突っ込むって時点で、安全が確立されていたとしても一般人なら躊躇うくらいなのに、一体どれだけの精神統一が成されていればこれが出来るのか。
「ふぅ」

一段落ついたのか、アロガシアは燃え盛る炎から手を引っこ抜いた。時間にして３０秒ほどだっただろうか、さしもの天才少女も堪えたのか顳顬から脂汗を流していた。

先程まで高温で炙られていたはずの右手は相も変わらず白く綺麗なままだ。それはつまり完璧な制御を行っていたということ。ほんとに、羨ましい限りだ。

「あら、熱心に私をお見つめになられて、どうかなさいましたの？」

ちっ勘づかれたか。羨望混じりの視線に気付いたアロガシアはめいっぱいのドヤ顔を貼り付けて、惚けたことを抜かしてやがる。

「別にぃ？　泣き虫で弱虫のアンタがまた無理してドジ踏んだんじゃないかって見てただけよ」

嫌味ったらしく言ってやるとアロガシアは物凄い形相をして俺を睨み付けてきた。魔法は一丁前のくせにこういう所は歳相応だなぁコイツは。そういうとこが可愛げでもあるんだが。

はぁ。昔はもっとちっちゃくて、いつもお姉ちゃんって言いながら背中にくっ付いてきてたのに、どうしてこうなったんだろうなぁ。

まあ俺が不出来なせいですけど。一度見下されちゃ、姉妹関係なんて容易く破綻するわな。はぁ。

なんだか凹まされた気分でセンセイが俺に渡してった羊皮紙を指先で摘む。

センセイは俺の魔法適性を見てくれた人なんだが、ウチで雇われた魔法の家庭教師でもある。でも結構有名な人らしくて、毎日忙しいところを合間を縫って来てくれるもんだから月に二三度しかやって来ない。

そんなんだから偶にやって来るときは個別で見てちゃ時間が無いので俺達姉妹をまとめて見ることになってる。

でも俺は基本的な魔法なんて使えないので専ら妹につきっきりになって教えていて、俺はその隣でペーパー問題だ。馬鹿にしてんのか。

隣で妹がどんどん魔法を使いこなしていく様をこれでもかと見せつけられる姉の気持ちを少しは慮って欲しい。

あーくそ。なんだかだんだん腹が立ってきた。むしゃくしゃを抑えるためにアレやるかアレ。
そうして俺が念じると指先で摘んだ羊皮紙がひとりでに捻れ、折り畳まれ、折り紙みたく鶴を象ってゆく。
これは魔法じゃない。魔力操作の応用だ。魔力は純粋なエネルギーとして活用できるだけでなく、量を貯めて放出するとちょっとした推力になる。
そうやって発生させた推力をこういい感じに捏ねるとあら不思議。手を使わずともこうして折り紙ができるわけである。
すごいでしょ。え？　くだらないって？　ああ、そうだよクソッタレ。これが俺の全力だ。こんなペン回しと同レベルの宴会芸擬きが俺の魔法技術の全てだ。なんか文句あるか。オォン!?
……　なんか悲しくなってきたな。帰るか……。
「ちょっとどこ行きますの。まだ先生が課したノルマも終わらせていないでしょう」
席を立った俺の背中にアロガシアがそんな言葉を投げかけてくる。相も変わらず真面目ちゃんだなぁ～おめえはよぉ。
「何処にって、帰んのよ私の部屋にね。いい加減、アンタが必死こいて魔法使ってるとこ見るのにも飽きちゃったのよ。センセイにはよろしく言っといて」
先公がいない今がサボり時だしね、こんなとこにいたってストレスが溜まるだけだからとっととおサラバするに限る。じゃあな！
「あ、そうだ。忘れてたわ」
ふと懐に入れていたものを思い出して、そいつをアロガシアの方に投げる。突然投げ渡されたブツに、アロガシアは慌ただしく両手をワタワタさせながら取り落としそうになったソレをなんとかキャッチした。
手にしたブツをまじまじと見ながら、「何だこれは」とでも言いたげな訝しんだ視線を此方に寄越してくるアロガシアに、俺はぶっきらぼうに告げた。
「火傷に効く軟膏よ。今朝物置からくすねてきたヤツ。隠してるみた

いだけど、痛みが酷いようだったら付けときなさい」
お前、上手く隠してるつもりだったんだろうが俺にはバレバレだかんな。今日俺にドヤるためにコソ練してたのかは知らんが、この間から微妙に庇っていた左手の方に結構な蚯蚓脹れが出来てるのが見えた。
精々嫌いな奴から憐れみを受ける屈辱と、日頃から天才なんて嘯いてる自分が地道に努力してるとこを知られた羞恥に悶え苦しむといいわ。ギャハ、ギャハハハハグベェッフォベェッフォ。

＊

ギリィと、食い縛った歯が軋みをあげたのを感じた。無意識に、あの女が渡してきた軟膏壺を砕かんばかりに握りしめていた。
あの女はいつもそうだ。私を何時までも子供扱いして、いつまで経っても私のことを認めようとしない。いつも私を見下し、見透かしたような態度を取る。それが酷く許せない。
私はあの女より優れている。才もあるし、十分すぎる努力を重ねてきたし、これからも積み重ねてゆくだろう。
私を見る誰もが私のことを認めてきた。私のチカラを認めざるを得なかった。いずれ世界最高峰の魔法士になるだろうと皆が太鼓判を押してきた。
私はもうただの泣き虫じゃない。ちっぽけな姉の背中について回る弱虫じゃない。
なのに、あのひとは未だに私のことを庇護物でも見るかのような眼差しを向けてくる。私のことを守るべき弱者だと考えている節がある。
違うでしょう！
守られるべき矮小な存在はそちらの方だ。弱っちいくせに私を庇おうとするな。私はもうお前の背中に隠れて蹲るだけの存在じゃない！
そう、思っていたのに。

「なんでよ……　なんなのよこれは……」
見やるのは、あの女が残して行った、どこかの鳥を模したオブジェに成り果てた羊皮紙。あいつがこれを手も使わず成したのは見ていた。
自分にこれは出来ない。魔法を学んでいるからこそ分かる。一体、どんな精度で魔力制御を行えば魔力の噴出だけでこんな芸当ができるのか。
やろうと思えば出来るものはいるのだろう。それなりの練習を積んだ上で、集中すればきっと出来るはず。でも、あの女のように、まるで片手間みたいにこんな事ができるかは分からない。才能の壁。
「くそっ」
まだあの女は私の上を行っている。足りない。まだまだ足りない。あの女に私を守られるに足る存在だと認めさせるにはまるで足りない。
もっと頑張らなくては。もっと努力しなければ。もっと。もっと、もっと。
でも、それはいつまで？
先の見えない現実から逃避するように拳を振り上げる。その手の中にあるあの女の優しさを振り払えないから、私はいつまで経っても弱いままなのだ。
捨てろ。
捨てろ。
捨てろ捨てろ捨てろ。
捨てろ！
けれど私は、そうやって何度も念じて、何度腕を振り下ろそうとしても、これまであの人の手を払いのけられたことはない。

4

「長らくお前には辛酸を嘗めさせられてきたが、今日はそうはいかない。決着をつけてやる」
「やれるもんならやってみなさいよ。そのヘナチョコ剣法で出来るもんなら、ね」
「なんだとこの野郎。負けてほえづらかくなよ」
「口先だけじゃなくちっとは行動で示してみたら？　まあアンタにゃ無理でしょうがね」
　そんなトラッシュトークを交えながら、俺は目の前の人物を見やる。
　視線の先、大層に木刀を構えながらやられキャラ特有の三下オーラを振り撒いているのは我が愛しの許嫁であるシリウス君だ。今日も今日とて見るに堪えぬ糞ガキっぷりである。
　そんなシリウスと俺が何をしているかというと、果し合いである。というのもこの若僧、俺と顔を合わせる度に俺に勝負を吹っかけてくるのだ。以前私が戯れにウチでお兄さまと稽古していたこいつにちょっかい掛けてそのまま張っ倒したことを根に持っているらしい。女の子に負けちゃって男のプライドが傷ついちゃったんだろうね。
　まあ俺も悪いことしたなーって思うし、精神的な年長者として大人気なかったなとは思うんだけど、こいつが弱すぎるのが悪い。
　素人の俺から見てもあまりにもすっとろいもんだから負けるに負けれんのよな。それにこいつに負けてイキられるのも癪だから嫌なのだ。
　でもまあ、毎度毎度こうして見てると確かに成長は感じられるのは確かだ。以前は馬鹿みたいに突っ込んでくるだけだったのでそこを転ばしていたが、最近は猪口才なことに牽制の真似事は出来るようになったらしい。やたらと剣先をカチャカチャ言わせてる。
　まあ真似事に過ぎんがね。見てりゃ分かるが本命の打突を隠すなんて芸当はまだ出来んらしい。やる気ないのが見え見えなんだよな。付き合う気にもなれないから木刀肩に担いで欠伸をかます。

そんな態度を取っていると舐められていると捉えられたのかシリウスが顔真っ赤にしてるのが見えるが、こちとら女の子だから一々構えるの割とキツイんだから多少大目に見て欲しいわ。

生前はこういうのに触ることなかったから初めて知ったんだけど、木刀って結構重いのよね。漫画のキャラとかが片手で余裕綽々と振り回してるのをよく見てたから舐めてたんだけど、無理。重心が引っ張られる。手から離れる。両手持ちでギリだ。まあ、これは今まで身体鍛えてこなかった俺にも落ち度はあるんだろうけど。

そんなことを考えていたら流石に業を煮やしたのかシリウスが木刀を振り上げて吶喊してきた。ご丁寧に雄叫び付きで。

でもフェイントかな、多分。腰が微妙に退けてる。重心が後ろ寄り。次には踏みとどまって、こっちが対応したところをズドンって感じかな。

小賢しくなったもんだ。お兄さまの薫陶のおかげかな。まあ見え見えなんスけど。

けど、付き合ってやる。向こうが右足を踏ん張って慣性を殺し始めたタイミングに合わせて踏み込む。

シリウスの表情がギョッとしたものになる。そらそうだ。想定より深い踏み込み、フェイントを読まれた動きをされている上、慣性を殺しきるまでお前は動けないもんな。いつもみたいにちょこちょこ俺の剣から逃げ回れないってことだ。

でも安心して欲しい。バッサリとはいかん。受けさせてやる。

気持ちスローに振り下ろした木刀を、想定通りシリウスは剣の腹で受け止めた。必然、鍔迫り合いの形になる。圧をかける。ギリギリと軋むような音をたてて、俺の木刀がシリウスの側へと押し込まれてゆく。必死の形相で踏ん張ろうとするシリウスだが、にじり寄る重圧は少しずつ歩を進めている。

膂力だけでこうはならない。男と女。性差による筋力量に加え、まして俺は生まれてこのかた鍛えたことなんぞないので、その差はシリウスの方に軍配が上がるのは確かだ。

だがこちらには魔力がある。魔力の放出によって得られる推力は、

使い方次第でこのように剣の重圧を引き上げることにも使える。
シリウスも魔法は使えるので似たようなことが出来ないわけではないだろうが、悲しいかな、そこまで頭が回らないようなのでこのまま潰されるしかないのである。
でもそれじゃあつまらない。俺が求めているのは華麗なる勝利。つまり魅せプだ。
わざと、剣に掛けていた魔力による重圧を解く。瞬間的に、辛うじて拮抗していた力のバランスが入れ替わる。つまり、シリウスの剣が俺の方に押し込まれた。
雪崩込んできた剣を横から抑え込むようにして受け流すと、刃は逸れ、シリウスの体勢が前につんのめった。俺に半ばもたれ掛かるようにして本気で力を込めていた故に、不意に支えが消えて姿勢が僅かに崩れたのだろう。それが、驚愕の表情となってシリウスの顔面に表れていた。
それをむざむざと見逃しはせん。右脚を軸に半身をシリウスの背後をとるように回転させると、遠心力をそのままに肩を押し込んで更に前へと倒してやる。
極度の前傾姿勢。今にも倒れこもうとする身体を支えるために反射的に動こうとしたシリウスの左脚に、その膝を抑え込むように右脚を絡めてやればあら不思議。
「ぐぇっ」
潰れたカエルみたいな鳴き声を上げ、無様にずっこけた。楽勝だぜ。
「はい私の勝ち。これで何戦何勝だったかしら、途中で数えるのやめちゃったけど全勝だってことだけは覚えてるわ」
「クソが。少しは旦那を立てようとかそういうのはないんですかね」
「誰が旦那よ誰が。そういう彼氏面やめなさいよゾッとするわ」
そういうのマジでやめて欲しい。悪寒がするんだよね。こちとら精神テンションは男のそれと変わってないからね。そういう趣味もないんで、俺の女扱いとかされると怖気が走るわ。縁談の件だって、今は全く想像がつかないからスルーしてるけど絶対嫌だかんな。

それにな、なぁにが愛しの許嫁だ。こちとらこやつと顔を合わせてかれこれ6―7年経つが、一度として胸がときめいたことなぞないわ。こいつとチューとかするくらいだったらアロガシアとやった方が万倍いいね。

せめて俺より強くなってから出直して欲しい。無理だろうけどな！

……　まあ、顔を立てろっていうのは分からんでもない。こいつにはこいつの立場もあるし、いざとなればこっちが折れて負けてやらんでもない。そういう理解はあるよ俺にも。

「でもアンタ、私が手を抜いたら拗ねるでしょ？」

「当たり前だろ。本気のエンヴィに勝たなきゃ意味ないし。つーわけで、もっかい!!!」

「嫌よ。今日はもう疲れたし。私、女の子よ？　そういうとこ労わってくれるのが男の甲斐性ってもんじゃないの？」

「なぁにが女の子だよ。ゴリラの分際で人に優しさを求めるな。寧ろお前が俺を労わるべきだ」

「アンタ死にたいんだってね???」

むっかつくなぁ～このガキンチョ。いつまで経っても可愛げ無い。こんな黒髪美少女を指さしてゴリラ呼ばわりとか情けなくないんですか？

「なぁにがゴリラよ。私が強いんじゃなくてアンタが弱いのよ。自分の貧弱さを棚に上げて人を非難しないでもらえるかしら」

「俺が弱い訳ないだろ馬鹿かお前は。なんなら1回お前の兄貴に勝ったことだってあるんだからな」

さも当然のように悪びれもなくそんな事を宣うシリウスに、思わず鼻で笑ってしまった。

お前、ここ数年ずぅっと剣術やり込んでるくせして今の今まで何もやってこなかった素人娘の俺に負けてる時点で言い逃れは利かねえんだよ。才能が無いとしか言えない。

それにお兄さまに勝ったって、そりゃわざと負けてくれたに決まってんだろ。お兄さまは俺とは違っておっとなーな聖人君子だから、無

才のお前にお情けをくれてやったに決まっとるだろうが。そういう意味なら俺だって勝たせてもらったこと有るわオタンコナス。
「……　なんだよ。言いたいことがあるならハッキリ言えよ。人のこと馬鹿にしてんの表情見てたら分かるんだからな」
「いや、別に。見た目通りのお気楽な頭だなって感心してただけよ。他意はないわ」
「やっぱり馬鹿にしてんじゃないか。剣を取れ、思い知らせてやる」
「やんねーって言ってんでしょうが。しつこいったらありゃしないわね」
　ぐいぐい迫ってくるシリウスを面倒くさげに追い払う。本気で面倒くさいのもそうだけど、一々疲れるんだよな。特にこいつも最近は小賢しい手を使うようになってきたからダルいったらありゃせん。
　ま、何度やっても結果は変わらんだろうがね。
「にしてもアンタは相変わらずいつもいつも勝負勝負って飽きないわねぇ～。そんなに私に負けたままでいるのが嫌なの？」
　そこんとこ俺も男だから気持ちが分からんでもないがね。女に力勝負で負けるってのは結構プライドが傷つくことだし。この世界、中世っぽいからなのか男尊女卑の傾向あるし、全然おかしくはない。
　負けりゃ悔しいのは当然だ。俺だって万が一にシリウスに負けることがあれば即リベンジマッチを申し込むだろうしな。
　ただまあ、ずっと負け通してたら流石に萎えるっていうか。分からされるもんじゃないかな。普通、諦めるだろう。
　その点、この執念はどっから湧いてくるのか結構気になるところである。負けん気で言ってんなら大したもんだ。
　そんな心づもりで聞いたのだが、意外にもシリウスは顔を俯けてそっぽを向いたように口を閉じてしまった。
　……　なんだよ。気になる反応するじゃねぇか。
「なによ、いきなり黙りキメちゃって。なんとか言いなさいよ」
「……　違うよ。そんなんじゃないよ」
「別に黙秘するってなら構わないけどね、それならそれでこっちはアンタが口開くまで永遠に追及し続けてやるからね。今日は寝れな

いって覚悟しときなさいよ」
「お前も大概しつこいなぁ!!!　分かったよ、言えばいいんだろう!!!」
　ちょろい。大概の男はこうやって顔近づけて、身体を寄せてやれば口を開くってメイド長のオバさんが言ってたが間違いないな。大抵口を割る。観念したように口を開くシリウスを見ると本当にそう思う。やったことあるの今んとここいつだけだけど。
「……　お前、魔法使えないんだってな」
「……　あー」
　言いづらそうに、そんなふうに話し始めたシリウスの言葉を聞いてだいたい察した。
　このこと、わざわざ言って馬鹿にされるのもアレなんでこいつに直接話したことは無かったんだが、一応許嫁なら別口で話が行っててもしゃーないな。
　だいたいンな落ちこぼれの、しかも女に剣で負けるなんざ他の連中に示しがつかないとかそんな感じの理由なんだろうってことは読めた。
「一回、それで破談の話も出たんだよ。そんな奴を寄越してくるなんて無礼だって」
　いいじゃん。破談。こちとら望むとこだよ。多分、今まで被った面倒の中で唯一の朗報だよそれは。そのまま進めちゃっていいぞ。御破算になったんだろうけど。
「それでさ、お前って結構敵が多いんだろうなって思ったよ。舐められてるって言うのもそうだけど、お前世渡りあんま上手くなさそうだしな。沸点低いから」
「余計なお世話よ。一番舐めてんのはアンタでしょ」
　敵が多いのは否定せんが、目下最大の敵はお前だからな？
　さも俺は違うって言いたげだけど、お前が俺の部屋に虫ばら撒いたの忘れてねえから。あれ後始末クソ面倒だったんだぞ。メイドには白い目で見られるしよぉ。踏んだり蹴ったりだったわ。
「だから、将来一緒になる俺が守ってやんなきゃなって思って」
　うん。うん？　話が突然飛躍してない???

「だから、だから、その肝心のお前に負けてちゃ格好がつかねえんだよ!!!　もっかい勝負しろやオラァ!!!」
「やんねえっってんでしょうが。無理矢理繋げてこないでよ鬱陶しい」
　なんか恥ずかしさ紛らわすように啖呵切ってるけど恥ずかしいのは俺の方だよ。
　なに、その俺様の女アピール。やめてくんない。サブイボが立ったわ。こいつ昔からこういうこと臆面もなく言えるからキショいんだよなあ。本当の女の子だったらこういうのに憧れたりするんかね。俺はしないが。
「それに、アンタなんぞに守って貰わなくても自分のケツくらい自分で拭けるわ。こっちから聞いといてアレだけど、一人盛り上がってもらっても私としちゃいい迷惑なのよ」
　善意っちゃ善意でものを言ってもらってるのは分かるが、これは俺の問題なんでね。辛辣な物言いをして悪いんだが俺もかつては男の端くれ、他人に自分のことをどうこうしてもらうにはプライドがありすぎる。どうかすっこんでいてもらいたい。
「……　そんなの、分かってるよ」
　拗ねたように小声で呟くシリウス。本当に分かってるんかね？
まあ、こいつが俺の本心を理解してようがしていまいがどっちでもいいんだが。……　少しキツく言いすぎたかな。フォローしとくか。
「でもまあ、アンタが私より強くなってくれるんだったら、それもありっちゃ有りね。期待しないで待ってるわ」
　俺はお前のこと嫌いだけど、女の子のためになんかやろうって決意は嫌いじゃなかったぜ。そこだけは認めてやる。
　まあガチで全く期待してないけどね。

5

俺は今、絢爛な装飾が至るところに施された無駄にだだっ広い廊下を肩をいからせて進んでいる。いつもなら自室に華麗な直帰をキメてベッドの上で微睡んでいるとこだが、今日は事情が違った。というのも、この屋敷のどっかにいるはずのお兄様を探しているのだ。

なんでそんなことしているかというと、シリウスの奴に頼まれたからだ。

いい加減ガキんちょとのチャンバラお遊戯にも疲れたからさっさと帰ってお昼寝したかった私は、私が抜ける代わりにお兄様を連れてこいと宣うシリウスの代替案をあっさりと受け入れた。ウチの前途有望な長男を呼び出せとはふてぇ野郎だなとは思ったが、話を蹴るとまた駄々を捏ねそうだったので俺は早々にお兄様を売ることにしたのだ。あの二人は仲がいいらしいし、お兄様も無下にはすまいと思ったのもあるがね。

にしても、いつも思うのだがウチの屋敷はなんでこうも必要以上にデカいのか。生まれてこのかたずっとここに住んではいるが、未だに迷うときがある。昔聞いた話が本当なら来客用の寝室だけで数十あるらしいし、ここを建てたっていう先祖サマは何を考えてこんな迷宮もどきを作り上げたのやら。

そんな訳で、ここで人探しをしようってんならもう最悪だ。自室に居なかったらぶっちゃけ総当りしか手は無い。そしてお兄様は気分転換とかいって毎日部屋を替えてるそうだから無理ゲー。場所知ってそうな使用人を探してはいるのだが、これがなかなか捕まらんしでクソ。

これはもう長期戦を覚悟せにゃならんかなって思ってたときだった。

「むっ」

「げっ」

お散歩中のアロガシアと鉢合わせてしまった。いや、ただ歩いて

たってだけで本当にお散歩中だったかは知らんけど。
「これはこれは、ごきげんようお姉様。先程までシリウス様と庭で野蛮な遊びに興じていたと思っていたのですが、もうお済みになったので？」
「ああ、見てたのアンタ。もう店仕舞いよ、流石に疲れたわ。んでお兄様にパスしようと思って探してたんだけど、知らない？」
「さあ、どうでしょう」
　如何にもお嬢様ってな感じでスカートの裾を摘んで瀟洒に挨拶をキメてきたアロガシアに、俺は面倒くさげに手を振るだけで返す。
　いつものごとく嫌味な奴だ。まあ、知らないのは本当なんだろうが。
「あっそ。んじゃアンタの方はこんな所で何してんの」
「それをわざわざアナタに言う必要がありまして？」
「つまり暇ってことね？」
　ぴしり、と。アロガシアの表情が固まる。図星をつかれたのか知らんが、少しは感情を顔に出さない術の一つや二つ覚えるべきだと思うよぼかぁ。
「ちょうどいいわ、お兄様探すの手伝ってくれない？　一人で探してたら日が暮れちゃうわ」
「は、はぁ？　なんで私が」
「んじゃ、任せたわよアロガシア」
　そう言ってすかさず元来た道へUターンをキメる俺。返事を待たずに速攻で離れるのがコツだ。断る隙を与えてはならない。
　こうすると変に真面目な我が妹は義務感に駆られてか大抵言うことを聞いてくれる。素直じゃないアロガシアはこうでもしなきゃ頼みなんて聞いてくれないしね。こんなやり方しか知らない俺を許して欲しい。
　ちなみに俺はこの後とっとと自室に戻る予定だ。面倒ごとは他人に押し付けるに限る。これが俺の処世術だ。
「ちょっと！　まだ返事もしてないでしょ！」
　ただまあそうは問屋が卸さなかったらしい。すぐにアロガシアが

追いついてきた。
　むぅ、早めに撒こうと魔力操作の要領で多少速力を上げてたんだけど。ちょっとは速くなったなコイツも。
「一応言っておくけど拒否権はないわよ。いや、あることにはあるけど。断ったら私も約束フケるつもりだから。そしたらシリウスは今日一日待ちぼうけくらうことになるわね」
「タチ悪……　っ！　そういうのお願いじゃなくて脅迫って言うんじゃないのっ」
「そうとも言うわ。あと、微妙に口調崩れてるわよ」
　指摘してやると慌てて口元を押さえるアロガシア。こいつ、変に生真面目なとこあるし責任感も強いのでこういう言い方すると断れなくなるのよな。操りやすいことこの上ない。多分、前世の世界にいたら社畜になって身体壊すパターンの人間だ。そういうとこ好感は持てるが、ちと心配になるとこでもある。
　ともあれ、ここで私が折れることはない。この交渉の前提条件として、私が『やらないと言ったらマジでやらない人間』であるということをアロガシアには信じて貰わなきゃならん。信用と言い替えてもいい。これを崩して、俺が『口先だけの人間』だと思われてしまえば今後アロガシアがお願いを聞いてくれなくなるであろうなので、絶対に譲歩はできない。
　俺は自身の快適ライフのために『やらないと言ったらやらない俺』を証明し続けなければならないのだ。だから情に流されて折れる気はサラサラない。
　そんな俺の硬い意思を感じ取ってくれたのか、アロガシアは深ぁ～～～いため息をつくと「分かりました」と諦めたように呟いた。
「分かりましたとも。探せばいいんでしょう、探せば。長い間シリウス様を待たせてしまうのも偲びないですし、やりますわよ。やりゃあいいんでしょう。全くもう」
「流石、私の妹ね。話が分かる奴で助かったわ」
　「手間がかかるお姉様ですわ」なぞと嘯きながら妙に嬉しそうに口角が微妙に上がったアロガシアを見て、なんだコイツと思いながら気

のない謝意を述べておく。
　まあアロガシアがこんな調子で折れるのはいつものことだ。気にすることじゃない。
「んじゃま、頼んだわ」
「ええ、頼まれましたとも」
　いい返事だ。ウンウンと満足して改めて踵を返して歩き出す。行き先？　俺の部屋だが？
　果報は寝て待つに限る。アロガシアが任されたと言うのならそれを信じるのが姉というものだ。信じるというなら俺も相応の行いをしなければならない。つまりはそういうこと。信頼っていうのは行動で示すものだと、俺は、そう思うのである。
　そういう訳なので早速帰路に就いたわけだが、どういうことかアロガシアが何故か付いてくる。多分、たまたまアテの場所へ行くための道が被っただけだと思うので特に触れない。廊下を曲がる。
　同じくアロガシアも廊下を曲がる。俺と同じように。……　まだ偶然の可能性はないこともない。
　意味もなく道を逸れる。同じくアロガシアも。……　うん。
「……　どうして付いてくるのかしら？　二手に分かれて探した方が効率的だと思うんだけど」
「舐めないでくださいな。私にアナタの意図が読めないと本気で思っているのなら大間違いですわ」
　……。
「分からないわね。なんのことか」
「惚けるならそれで結構。でも万一、私だけが苦心してアナタは怠けて遊んでいるなんて事態になるのは非常に癪なのでね。逃がしはしませんわよ」
「……　好きにしなさい」
　ふっ、所詮ただの鴨だと思っていたが我が妹よ。なかなかどうして成長しているようで姉ちゃん嬉しいよ。クソが。
　まあサボろうとしてたのは事実だし、信用なくすことしかやってこなかった俺が全面的に悪いので強く言うことなんて出来ないんです

けどね。だから死なば諸共精神で監視がてら張り付かれるのは別にいい。
いいんだが――――。
「……」
「……」
こうなるんだよな。沈黙が痛い。俺ら仲悪いから普通に話せってなったら結構困るんだよ。話題ない以前にどう話しかけりゃいいか分からん。そもそも向こうに俺とおしゃべりする気があるのかも分からんし。気安く話しかけて無下にされたらちょっと傷つく。
なので黙りを決め込んでいるわけだが、それはそれで気まずい。空気が妙に重い気がする。どっち選んでもなかなか地獄だ。
「シリウス様とは」
なにか話を振るかどうか迷っているとアロガシアがおずおずとそう切り出してきた。
「とっくに婚約は解消されているものだと思っていましたわ」
「私もそう思ってたわよ。でも相変わらずあのアホ面下げて来てるってことはそうならなかったみたいねぇ」
魔法適性の有無は貴族間の交流の中でもそれなりに影響が出る。ある程度それが血統に依るものであるというのもそうだが、単純に舐められやすくなるというのがある。
家の格というのは保有するチカラによって決定される。それは財力であり、権力であり、戦力。形はいくらでもあるが、魔法の力というものはその中でもかなり分かりやすい。視覚化されているからだ。さながら神話の神々の振るう奇跡の如く、そのチカラを魔力を持たない人々は信奉している。
ある意味、魔法適性が群を抜いて高い家が貴族となってそういう連中の上に立つのは必然だった。人間は自分の及ばないチカラを持つ存在を畏れて敬う生き物だ。闇夜に紛れて光に群がる蛾のように自分より強い存在に惹かれて従う。盲信といってもいい。
つまり、貴族社会の者共にとって魔法とは人々を従えるためのツールなのだ。それを失えば少なからず混乱を招きかねない以上、下手な

リスクは取るべきではない。
　ある意味、美醜や教養よりも優先されるべき事項なのだ。魔法適性というやつは。
「理解に苦しみますわね。お姉様のような不良物件、タダでも要りませんのに」
「なに、喧嘩売ってんのアンタ？　買うぞゴラ」
　それはそれとしてンな言い方されてキレない訳じゃない。人の感情というのは事実に則さないものなのだ。
「でもまあ、理解不能っていうのは賛成するわ。実際、そういう話も出てたらしいけど。シリウスの奴が蹴ったってさ。代わりに面倒な条件でも出されたんじゃないかしら？」
　一応、チカラは代替が利く。俺を娶る代わりに何かしらの功績を立てるみたいな妥協案を出すか出されて、それを飲んだって感じじゃないかな。知らんけど。そうまでしてこんな可愛げの無い小娘が欲しいもんかね。逆に迷惑だわ。
「随分と余裕ですわね。その条件とやらが達成出来なかったら晴れて婚約は破棄。いき遅れ確定のお払い箱になるというのに」
　そりゃ余裕よ。結婚すんのやだし。あーでも、そうなったらどこぞの小汚いオッサンのとこに出されるようになんのかな。そいつはヤダな。キモいし。
　まあ、でも。
「多分だいじょうぶっしょ」
「……　その楽観の根拠は？」
　眉をひそめてアロガシアが尋ねてくる。根拠という根拠でもないし、楽観的であることは否めないが理由は簡単だ。
「あれでもアイツ、約束破ったことないからね。だから何とかするんじゃないの？」
　その点については俺はあの小僧を信用している。たとえ達成は出来なくとも、最大限の努力をした上で手を尽くすだろう。アレはそういう男だ。そこまでやってダメだったなら、それはしゃーないので責めるつもりはない。

俺としてはそういうことを結構軽いノリで言ったつもりだったんだが、思いのほかアロガシアの表情がキツいものになった。ホントに悔しげに歯を食いしばるなどしている。

え、なんで？　もしかしてこの娘、シリウスのことが好きだったりするんのかな。俺への当たりが強いのもそれが原因だったりして。

一応こいつにも婚約者がいるんだが、以前会った時はロクでもない奴だったし、然もありなん。そういえばアロガシアの俺への態度が変わったのもあのときだったけな。

んー別に俺としてはこいつとシリウスがくっつくのは全く問題がないんだが。なんならクソ親父にでも打診してみようかな。政略結婚ってなら俺じゃなくてアロガシアでもいいだろうしな。

「アロガ――――」

そんなことを口にしようとした時だった。

「やっ。二人とも！」

それは一瞬だった。考えるより先に肉体が反射行動を起こしていた。

咄嗟に背後で聞こえた声。左肩に乗せられた手。それを認識した瞬間、ただ頭が真っ白になった。

ショック。

恐慌。

そういう症状。

ただ、敵がそこにいることだけが分かった。

左腕を振り上げてのっけられた手を弾く。

同時に、左足を軸にその場を駒のように回転する。

くるりと。回転する視界。敵を認識する前に右拳を振り回す。回転エネルギー。遠心力。腰を入れて身体ごと巻き込んで、そういうものが蓄積された拳は勢いを伴って今にも敵に叩きつけられようとして――――

「お姉ちゃん！」

悲鳴にも似たアロガシアの絶叫に我を取り戻した。そして気付く。敵の正体。自分が攻撃の最中にあることを。

やっぱ。多分、そう思った頃には遅い。肉体と思考のスピードは同速ではない。思考を挟んでは対応が遅れるので、基本俺は反射で身体を動かしている。

だから咄嗟にわざと体勢を崩して倒れ込む形で勢いを殺そうとしたのは反射的にとった行動なのだろう。

倒れ込む身体。目まぐるしく状況が動いたので未だに混乱の最中にある俺。受け身は取れない。

そんな俺をそっと支える存在があった。優しく俺の体を抱きとめたのは先程俺に触れてきた人物。

「すまん。まだダメだったか。冗談でもやるんじゃなかったな」

俺とアロガシアの兄。バニタス・オブセシオンだった。